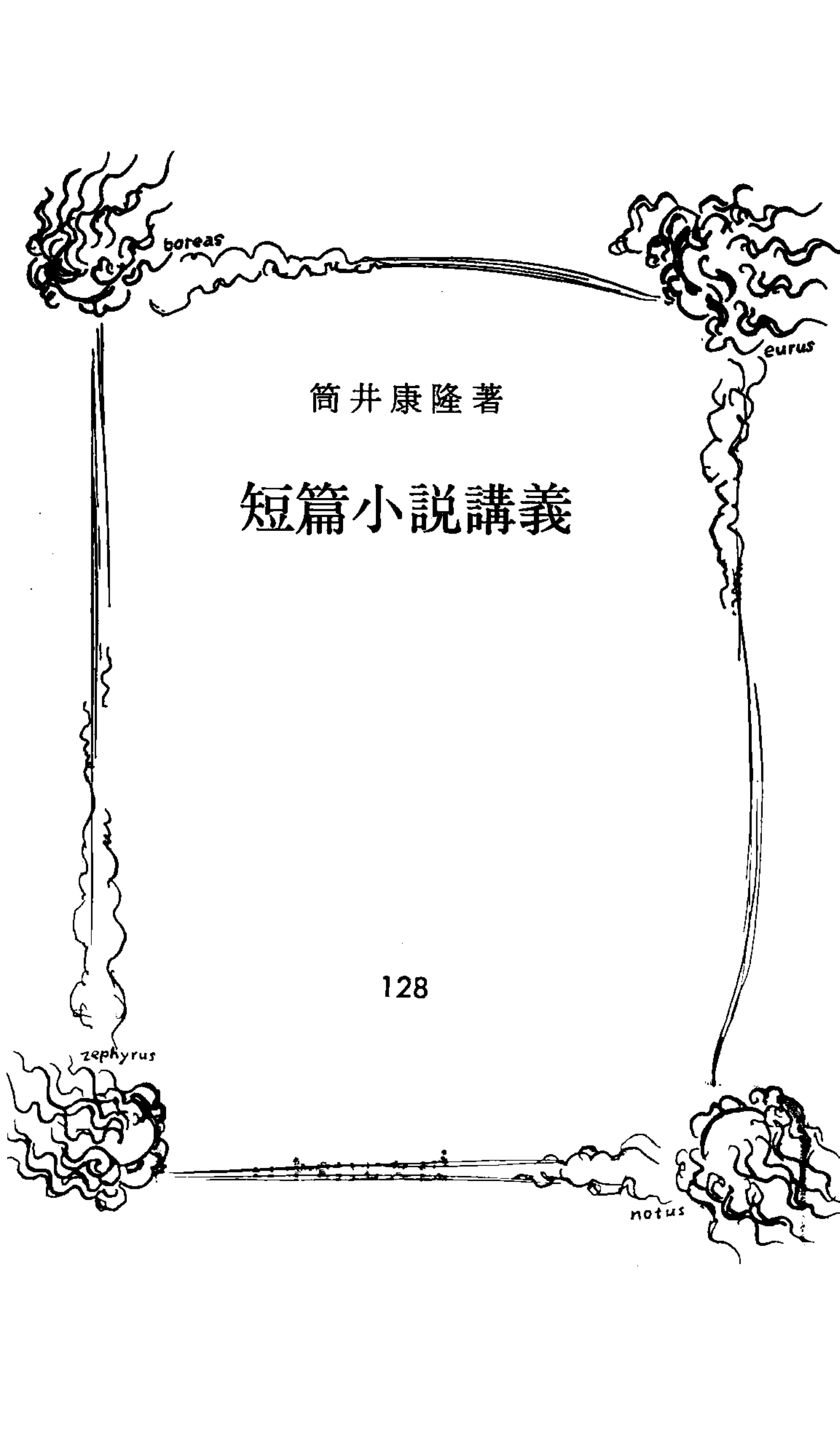


筒井康隆著

短篇小說講義





筒井康隆 著

短篇小說講義

128

筒井康隆

1934 年大阪に生まれる

同志社大学文学部卒業

作家

著書—「文学部唯野教授」(岩波書店)

「夜のコント・冬のコント」(新潮社)

「残像に口紅を」(中央公論社)

「筒井康隆全集」(全 24 巻, 新潮社)

ほか

短篇小説講義

岩波新書(新赤版) 128

1990 年 6 月 20 日 第 1 刷発行 ©

定価 520 円

(本体 505 円)

著 者 筒 井 康 隆

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

印刷・精興社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

ISBN 4-00-430128-9

1 短篇小説の現況 I

2 デイケンズ「ジョージ・シルヴァーマンの釈明」 17

3 ホフマン「隅の窓」 35

4 アンブロウズ・ビアス「アウル・クリーク橋の一事件」 53

5 マーク・トウェイン「頭突き羊の物語」 73

6 ゴーリキー「二十六人の男と一人の少女」 93

目次

7	トオマス・マン「幻滅」	113
8	サマセット・モームの短篇小説観	133
9	新たな短篇小説に向けて	151
10	ローソン「爆弾犬」	171
	あとがき	199

1

短篇小説の現況

1 短篇小説の現況

阿部昭氏の『短編小説礼讃』という本がこの岩波新書の一冊として刊行され、ベストセラーになったのがきっかけで、短篇小説そのもののブームというのではなく、なぜか短篇小説という文芸ジャンルや形式についての取り沙汰や論議が活潑になり、それが二、三年続いた。文芸雑誌ではしばしば「短篇小説とは何か」といった特集が組まれ、作家たちのエッセイや、アンケートの返事などが掲載された。名作といわれている過去の短篇小説の再掲載による特集や「わたしの好きな短篇小説五篇」などといったアンケート特集が組まれたりもした。ぼく自身も、請われてそうした特集のひとつにエッセイを書いたりもし、そうしたことがぼくに、こうして短篇小説を再考させるきっかけになったのだった。

多くの作家がアンケートに答えてさまざまな短篇小説観を展開していたが、ぼくが興味を持ったのはそれらの中での田辺聖子氏の次のようなことばだった。「短篇小説というの

は、よくできましたといって赤で三重丸をつけてあげたくなるようなものがやたらに多いので困ってしまう」

これはどういうことかというところ、模範的な短篇小説が存在するという観念の一般化があり、田辺さんはそれを否定的に指摘しているのである。模範的な短篇小説が存在するということは、短篇小説を書く上での規範があるということだ。しかし、これはおかしいことである。短篇小説に限らず、小説というものは、いうまでもなく、何を、どのように書いてもいい自由な文学形式なのだ。意外に思われる読者もおられようが、実は小説というのは最も新しい文芸ジャンルなのである。小説以前から存在した詩や戯曲などの形式による拘束、それは即ち韻律だの三一一致の法則（人物、場所、時間の一致。登場人物の数がある範囲内で一定であること。場所が一定であること。ある一定時間内に出来ごとが起り、終ること）だのといったものであるが、そうした形式上の束縛を嫌い、より自由に書こうとして生まれた文学形式こそが小説だった筈なのである。

それならなぜ今、小説作法の類の書物や、発言や、常識と称されるものや、コツと称されるものや、その他何やかやが巷間に満ちているのだろう。そしてそれらの中には特に、

1 短篇小説の現況

短篇小説を対象にしたものが多いように思われるのだが、これは何故だろう。

第一に言えることは、日本人の芸道好きの性向が、小説を芸道化しているという事実である。さらに小説を芸道化するにあたって、長篇小説よりは短篇小説の方が「お稽古」に適していたということもいえる。なぜなら短篇小説は、俳句だの短歌だの詩だの戯曲だのといった、小説以前から存在する比較的短い文学形式の作法をそのまま応用することができるから教えるのに楽であり、ばらばらに分解して、「起承転結」だの「伏線」だの「対応」だの「象徴」だのを拾い出して見せることが簡単にできた。たとえばドストエフスキイの「カラマーゾフの兄弟」でこれをやろうとしても無理である。そして何よりもまず、初めて小説を書こうとして、または小説家になろうとして書く方法のわからない者が、習作として最初に挑む形式が短篇小説だったからである。

こうした短篇小説のお稽古ご化は、カルチュア・センターなどの創作講座やそれに類するものの隆盛によって、最近ますます進行しつつあるようだ。さらに文学新人賞の対象がほとんど短篇小説であり、これを選考した委員の選後評などが、最新の短篇小説作法として、いわば「最近の傾向と対策」といったかたちで受けとめられ、お稽古に拍車をかける。

こうしたことがはたして短篇小説の傑作の誕生につながるのだろうか。ここにひとつ、たいへん参考になる発言がある。ぼくの友人の八橋一郎氏は、長年朝日カルチャ・センターや文学学校で創作講座を持たれ、現在も関西の各地で小説志願の人たち多くを教えておられる優秀な実証主義の文芸評論家だ。このひとの門下生の中からは、主に女性の新人が輩出している。文芸誌の文学新人賞、女流文学新人賞などをとったひとが七、八人、最終候補まで残ったひとが十七、八人。これはたいへんな実績であって、現在その数はもっと増えているかもしれない。「しかしねえ」と、八橋氏は言うのである。「それくらいはなんでもないことで、誰にだってその程度までなら教えることができます。問題はそこから先なんです。新人賞をとってそれっきりというひとがほとんどで、大成するひとがいない」

芸道化した短篇小説作法がお手本にしているのは、当然のことだが古今の名作とされている短篇小説であり、ここから短篇小説の二極分裂が始まった。はるか高みには短篇小説の神様とされている作家たちによって書かれた古今の名作が存在し、地上にはそれらをお稽古ごとのように学ぼうとする多くの作家志望者がいる。そして実はその間で、現代小説

1 短篇小説の現況

としての短篇小説そのものは次第に衰弱しつつあるのだ。

多くの現代作家が短篇を書きたがらないように思えるのはなぜか。書いてもそれは、つまり短篇そのものは百枚、百二十枚、百五十枚と、次第に枚数が多くなってきているように思えるし、作家もできるだけ多い枚数を望んだりもするのだが、それはなぜか。結果的に、かつての二十枚以内の多くの名品を越える傑作がなかなか出ないが、これらはそもそも何に起因するのか。

短篇小説の掲載を中心に行っている文芸雑誌の編集者の多くが現在こうした疑問を抱いて、だからこそその解答を求めようとしての前記の特集やアンケートだったのであろうが、これらは必ずしも彼らがいささか自虐的に想像し結びつけている「原稿料の問題」にのみ帰するものではない。下世話な話題で恐縮だが、物価を考えれば以前に比べて相対的に安くなったとはいえ、どの雑誌の原稿料も短篇長篇一枚あたりの単価は同じ作家に対して同じの筈である。したがってこの問題はむしろ、小説のお稽古ごと化、芸道化の末に生まれた一種の極論、「短篇小説を書くのは長篇小説を書くよりもずっとむずかしい」という誤った考え方に由来するのではないだろうか。

事実、ぼく自身も含めて多くの作家がこうした常識にとりつかれ、支配されているし、作家をとり巻く文壇内外にもこうした常識は行き渡っていて、それがただちに短篇小説を書いた作家にはね返ってくるという現状がある。「長篇を書くとは必ず何らかの形で評価されるが、短篇を書いても評価されることは少ない」「小うるさく時評で酷評されるだけで決して褒められない」、そして結果として「短篇を書くのはしんどい」「短篇を書くのは損だ」という結論に結びつくのである。因に、「読者が短篇を喜ばないから」「短篇集は売れず、なかなか本にしてもらえないから」という作家側からの言いわけは、一方で長篇よりも短篇集の方がよく売れ、読まれている作家が少数ながらも存在することによって成り立たない。

以上は現役の実作家としてのなはだ形而下的な知識を披露したわけだが、一方評論家はというと、ポスト・モダンといった状況、文学理論の方ではポスト構造主義といった、文学のみならず社会全体を分析し批評する方法の発生と前後して、なかばは社会評論家でもあらねばならなくなったことから、自分たちにもその責任がある筈の短篇小説の衰退を理由づけねばならなくなり、「多くの枚数が費やされぬ限り、世界全体を捕捉することは不

1 短篇小説の現況

可能になった」という、またはそれに似た発言をくり返し、たとえばそれが「長篇のさらなる長大化」のみを論じる文脈の中で使われた際でも、または「今や、いかに枚数を費やそうが、小説で世界を捕捉できるものではない」という文脈の中で使われた際でも、文壇内外の人たちに短篇小説の存在価値をなんとなく疑わせる効果があったのだろう、短篇小説を、単なる「お稽古ごと」とか、またはそのお手本とか、そしてバラエティの一部としての文芸雑誌に対するおつきあいといった地位にとどめ置くべきものという常識を行き渡らせてしまった。

それなら長篇小説は本当に世界全体を捕捉しなければならないものなのだろうか。ひと昔前、哲学は世界の全体像を捕捉する唯一の小径であると言われていた。やがて哲学が科学にとってかわられ、さらにテクノロジーに対する疑問が出てきて、世界を捕捉する道は閉ざされた筈である。それがなぜ今になって突然、長篇小説にのみ可能になったのだろうか。仮にそうであるとしても、なぜ作家が、哲学者や科学者に不可能になったことをやらねばならないのか。これは短篇小説作法の常識とされている「短篇小説は人生をすばっと切った、その断面のようなものでなければならぬ」という言いかたとどれほど違うだろ

う。

最初に立ち戻るが、小説とは、何を、どのように書いてもよい自由な文学形式である。したがって長篇小説は別段「世界を捕捉」しなくてもよいし、短篇小説は「人生の断面」でなくともよいことになる。「この長篇はかくも多くの枚数を費やしながら世界を捕捉しそこなっている」という一時期よく見かけた批評は、過去の「世界を捕捉できた」時代に書かれた、世界を捕捉したと言われる長篇をお手本にしてすべての長篇を見ようとしていく芸道批評といえる。「人生の断面」を浮かびあがらせた過去の名短篇は、それ故に「名短篇」となった。だからといって現代の短篇すべてがそれをお手本にする必要はない。

このように、現在小説作法と言われているもののほとんどは方法論ではなく、体験論である。これはそうなるのが当然であり、そもそも小説というのは俳句だの短歌だの詩だの戯曲だのといった形式のすべてから自由になろうとして生まれた方法論不在の文芸ジャンルだったのだ。

短篇小説の場合、特にその作法がうんぬんされるのは、それが短い形式であるために、日本で好まれる私小説的な短篇などは、ともすれば韻律のない自由詩や身辺雑記の随筆な

1 短篇小説の現況

どと区別がつかなくなり、また、意図するところも似てくるためで、いわばこれが世に短篇小説作法の満ちあふれる第二の原因となっている。しかしこれとて、小説があらゆる形式から自由になろうとしたジャンルである以上は、短篇小説であると同時に自由詩でもあるといった作品であつてもかまわないということになる。ぼく自身が、ある評論の文中ただ一カ所に「これは小説だから」といった文を挿入しておき、雑誌掲載時には小説の扱いをしてもらい、その後この文章をエッセイ集の中に収録したことがある。そういうことをしても別段かまわないのであり、まさに随筆そのものといった文章の末尾で「これはすべて虚構である」といった意味のどんでん返しをうち、全体を短篇小説にしてしまうことも可能なのだ。

短篇小説という形式の外在律は、短いということだけだろう。「外在律」ということばは存在せず、辞書にも載っていないのだが、しばらくご勘弁願おう。短いということだけが形式であるとするところまた、ともすれば「短ければ短いほどよい」などといった芸道的解釈がなされやすく、そして実際にそういう主張もあるが、しかし実はこれすらどうでもいいことなのである。たしかに職業作家ともなれば、枚数制限という外在律があり、つい

でに言うならこれに加えて締め切りなどといった下らない外在律もある。だが例えば十五枚、二十枚という傑作が山ほどあるとすれば六十枚、八十枚の傑作だって山ほどある。逆に言えば、短篇小説における外在律が、職業作家においてすらせいぜいその程度のことであるという認識を持つことの方がより重要であろう。

読者はすでに、「外在律」などということばを使ったほうが、次いで「内在律」ということばを使うつもりだろうということをお先刻ご推察の筈だ。「内在律」は近代詩の用語であり、韻律を捨てた自由詩の詩人が、それでもやはり心の中の天然自然のリズムを見出そうとして苦しんだところから生まれたことばである。しかしここでは「外在律」も「内在律」も、共に「律」を韻律の律、つまりリズムではなく、「形式を束縛するもの」だとか「掟」だとか、つまり法律の律の意味で使っていることをご承知願いたい。

さて、それでは、ほとんどの外在律から自由になり、短篇小説作法に類した書物をまったく読まず、名作とされている短篇小説からどのような影響も受けず、書きたいように書けば、よい短篇小説が書けるのだろうか。

これはもちろん、書ける筈がない。いやしくもこれから短篇小説を一篇書いてみようか